

東京農業大学
拓友会ニュース

第34号・2018年発行
発行所 東京農業大学拓友会
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
TEL.03-5477-2408 FAX.03-5477-4032
e-mail : takuyu@nodai.ac.jp
<http://www.nodai.ac.jp/int/original/about/index.html>

第60期総会および懇親会のご案内

第60期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

今年度も収穫祭期間中に開催します。数々の特別イベントも計画されていますので、万障お繋り合わせの上、多数ご出席下さいますようご案内申し上げます。

なお、平成30年の収穫祭は11月2日(金)より11月4日(日)に開催されます。

総 会 1. 日 時 平成30年11月3日(土) 午前11時より12時まで
2. 場 所 2号館3階 国際農業開発学科 共通利用室

懇親会 1. 日 時 平成30年11月3日(土) 正午より
2. 場 所 2号館3階 国際農業開発学科 共通利用室
3. 会 費 4千円(配偶者、子供の同伴歓迎致します。
配偶者および子供は、一人につき2千円)

どうぞ皆様お越し下さい。なお、懇親会のみの参加も歓迎します。

お問い合わせはこちらに連絡をお願いします。

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学国際農業開発学科 中曾根 勝重
Fax: 03-5477-4032
E-mail: katsu10@nodai.ac.jp

アフリカの稻作技術協力に魅せられて

拓殖14期 栗田 絶学

1.はじめに

昭和44年に農業拓殖学科に入学以来、「農大奉仕会」に入会し農村地域でのワークキャンプ、韓国派遣隊に参加して奉仕会OBが韓国の慶州郊外に位置する陰性らしい病患者の社会復帰の村、希望村支援で立ち上げた国際奉仕農場の建設支援活動、韓国農村での援農活動等に明け暮れた。この4年間の学生生活を通して自分の感性を掘り下げ、生涯を賭けて進むべき方向が見出だせたことが最も大きい。貧窮にあえぐ農民の生計向上に己の人生を賭して自分を磨き成長していく生き方に大きな安らぎを覚える己の感性一即ちこれが情熱を持って生涯打ち込める道となるであろうことを理屈でなく身を以て実感できることであった。講演では主にルワンダの稻作技術協力事業について紹介したが本稿では卒業して45年の軌跡を振り返り、国際農業開発学科の学生諸君の進むべき道の参考となれば幸いである。

2.埼玉での4年間から国連ボランティア (UNV) で北イエメンへ

将来、途上国で活動すべく国内で数年間、農業技術を習得してから渡航すれば良いと安易な考えていた。従って就職先が決まったのは3月下旬で土壤肥料研の教授のつてで埼玉園試に圃場作業員として圃場試験の補助的作業を通じて研修することになった。1年後に応募したラオスの野菜隊員として合格したが同国の政変勃発でバングラへの派遣変更如何とする通知が協力隊事務局より打診されて自分の本意でなかったので断念した。そしてトキタ種苗に入社し、大利根育種研究農場で育種の基本である野菜の栽培技術を学んだ。2年後に北イエメンに協力隊訓練を経てUNVとして1977年2月に赴任した。配属先はFAO中央農業研究普及機関であった。同機関はFAO専門家や

UNVが一枚岩となって現地農民の農業収入向上に取り組む理想的な組織をイメージしていたが現実との乖離は大きく、他方、日本で習得した野菜栽培技術の知識・経験ではこの灼熱の乾燥地の厳しい農業生産環境には対応困難な無力感を痛感した。

3.米国留学からJICA専門家としてタイに赴任

このため、さらなるキャリアアップが必要とイエメンで模索していた所、JICAの海外長期研修制度を知り、任期を4ヶ月短縮して帰国し応募した。幸い、合格してJICA特別嘱託として1981年1月より農林水産計画調査部付けで1年間、勤務することになった。この間に研修先を見つけてJICAの承認を得る必要があり、留学準備で無我夢中に突き進み、1982年1月にアリゾナ州立大修士課程で「栽培学的見地からの乾燥地農業」を専攻するために渡米した。講義は学会誌の論文をベースとしたものが多く、語学ハンディを克服するために毎回、講義を録音して図書館で何度も聴きなおしてノートを整理することを日課とした。この間、同大学のTESLに留学していた日本人女性と結婚して長女も生まれ、1984年2月の帰国時には3人になっていた。帰国して3ヶ月後にJICA専門家として東北タイのコンケンで開始された「東北タイ農業開発研究計画」に3年間赴任した。同計画は三角協力として日・米・タイが協力して貧困指数の高い東北タイの農業生産性向上を目的に土壤・作物・農業気象に係る研究開発プロジェクトで業務調整を担当した。

4.ODA開発コンサルタント業界へ

(1) ザンビア農業実証調査

1987年5月にタイより帰国して1年間の浪人生活(農研センターで技術講習生)時、農大の故松野教授より、「国際航業(株)で稻作の要員を探している。栗田、稻作でザンビアに行かないか」と誘いが来た。稻作は実習経験のみで二の足を踏むと「兎に角引き受けに行くように」との強い御達しで急遽、同セン

ター谷和原圃場の稻作研究室に通い水稻の俄か勉強を開始した。そして39歳になる1988年7月からJICAの「ザンビア農業実証調査」にコンサルタントとして参画して4年間の実証調査、その後のフィジビリティスタディ(F/S調査)で足掛け7年間ザンビア西部州の稻作開発事業に関わった。

当初、コンサルタントとは「何ぞや」も分からず、首都ルサカから600km離れた西部州のカラハリ砂土が広がる辺境の地、Monguに赴いた。調査団のミッションは、国際河川ザンベジ川の広大な氾濫原縁辺部の一角に実証調査圃場を造成し、稻作



ザンベジ河氾濫原のナムシャケンデ実証圃場

を中心とする総合農業技術の開発とそのための農地整備水準の確立を図り、将来の具体的開発の手段として重要な作物生産技術指針と灌溉／水管理及び農地整備

指針を策定することであった。

圃場造成工事は氾濫原縁辺部と中腹部に各々5haと2haの実証圃場を整備して1988年11月より水稻を軸とする実証調査を開始した。氾濫原縁辺部は黒泥・泥炭土層下に中粒石英砂が堆積する土壤が広がり、下から上がってくる水は醤油のような色を呈していた。新規造成水田に畑苗代で育苗した苗を定植すると1週間で葉身が褐変して枯死した。考えられた要因は黒泥・泥炭土壤の強酸性に起因する根からの養分吸収阻害、及び土壤に含まれる有機物分解過程で発生する有機酸等による害作用、要素欠乏等による生育阻害である。石灰を首都ルサカで調達して施用したところ、何とか稻が生育することが確認出来た。然し、生育後半で秋落ち症状のゴマ葉枯れ病、いもち病などの多発で惨憺たる結果であった。

「栽培技術開発」とは被受益者である現地小農の身の丈に合った実効性ある技術の系であることが大前提である。団内で現状調査結果を踏まえて日夜、議論し、仮説を立てて現地試験や圃場試験を経て検証を繰り返して漸く1992年12月に「栽培技術指針」として取り纏め、ルサカで政府及びドナー関係者を招請して技術移転セミナーを開催して一区切りがついた。

初めてのコンサルタントとして右も左も分からぬ中で、現場に飛び込み無我夢中で命題に取り組んでいくことに農業・農村開発事業の幅の広さ、奥の深さをひしひしと実感した。農民目線で事業推進の重要さを学んだ。事業全体の領域を見据えて小農の作物生産環境を取り巻く系で最適な資源配分を策定する能力が求められ、自分のキャリアビジョンが鮮明になりつつあった。学生時代に韓国の希望村で感じた想いがこのザンベジ河氾濫原で日夜取り組む命題と重なり、農業・農村開発事業の最前線でコンサルタントとして係われることに強烈なインパクトを感じる転機となった。

(2) ルワンダの稻作協力事業へ

ザンビアを皮切りに不惑を迎える目前にODAコンサル業界に入り、3つの会社を経て昨年9月に引退するまでの30年間、「営農・栽培」をコアとする農業開発コンサルタントとして30カ国余の途上国で農業・農村開発事業に携わってきた。コンサルタントとは「知的サービスを提供して対価としての報酬を得ることを職業とする者」を云う。ODA援助の流れで「プロジェクト形成」から「実施」までを上・中・下流と大別するとプロジェクトファインディングから下流の技術協力事業まで様々な開発業務に参画する機会を得た。その中で中・下流業務に該当するルワンダの技術協力業務(2006.5~2017.9)について講演では支援態

様で軽く触れた、間接支援やプロジェクトの持続性について述べてみたい。

政府間援助におけるJICA技術協力のコンセプトは受入国側のカウンターパート機関(C/P機関)に技術移転を実施してプロジェクト協力期間が終了しても同C/P機関が受け継いでいくことを究極の目標に置いている。農業技術協力事業では普及サービスを担うC/P機関関係職員と裨益者の農民グループに同時に技術移転を進め、同C/P機関がプロジェクト終了後も普及事業展開を継承するシナリオで活動する場合が多い。被援助国が自国予算と人材で技術移転された事業を継承していくことを「内製化」と云う。ここが他ドナー諸国の支援方法と大きく異なる所である。即ち、他ドナーはプロジェクト開始時にプロジェクト実施ユニットを組織してモノ、人材を民間から調達し、プロジェクト終了時に解散するのでC/P機関にプロジェクト実施のノウハウが残らないアプローチである。



苗代播種研修で水苗代の播種床作り実習



水管理研修の実習で設置した簡易分水工

ルワンダで関わったJICAプロジェクト3本の中、1本目は開発調査業務であったが残り2本は技術協力事業である。この2本共にコメ農協とC/P機関への研修業務を同時並行で実施し、3本目はこの普及事業を全国展開する小規模農家市場志向型プロジェクト(SMAP: 2014.11~2019.10)である。コメ農協の支援態様でSMAPが支援対象に選定した郡に直接支援(SMAPチーム直営)と間接支援(C/P機関:郡庁直営)の2方式導入がSMAPの実施枠組みである。郡庁主導による間接支援の進捗は郡予算執行、及び研修運営管理業務で温度差が大きく予断を許さぬ状況である。また、支援対象から漏れた郡以外の他郡にもコメ農協が存在し、SMAP稻作普及を如何、展開するかが課題である。それ故、普及行政の民営化で走り出した新体制で実効性ある普及関係ステークホルダーとSMAPの連携を進めて全国展開を模索している。

ルワンダは地方分権化が進む中で中央から地方への強烈なトップダウン組織体制風土があり、ハイレベルな政策立案の中核にSMAPチームが食い込むには様々なハードルがあり、ここに「内製化」へのアプローチの難しさがある。

他方、農民レベルの巻き込みは、農民との信頼関係を築く事が出発点である。普及する技術は農民が営農する生産環境下で循環していく実効性のある系であることが必須である。実践と講義の体系的な研修活動を通して改良技術の効果を農民に実見させて納得してもらうことが信頼を得る第1歩となる。そのためには事業対象地域の的確な現状把握に基づいたニーズ分析を反映した研修計画の策定、実施、評価を通して関係者間で評価結果を共有して次の研修ループ(PDCAサイクル)で改善すべき事項の道筋を示すことが関係者の意志決定を促し、実践意欲を鼓舞する要である。

国際協力路線で農業開発コンサルタントを生業として行くには自分のコアとなる技術を磨き、援助関連知識も含めてコア技術に関連する学際的分野にも精通しておく必要がある。如何なる農村現場に入ろうとも幅広い知識・経験を基に農民目線に即した最適な系の実施計画を策定する視点、調査・解析能力を養うことが

必須である。且つ、計画を実施・運営・管理していく能力、その評価結果を取り纏め、事業関係者と協議して動かす能力、資質が求められる。言わば人間の総合力が試される職業であり、自彊不息の体現である。

5.引退して第二の人生

昨年9月末で現役を引退し、人生100年と云われる長寿社会となり、これから如何、余生を生きるかで長年温めてきた事がある。業務の中で常に戒めとしていたのは「営農・栽培を専門とするコンサルタントは農業の実践経験なくして(借り物の知識)計



C/P機関の局長一行に展示研修圃場で導入した品種の説明

画を策定すること勿れ」である。現役時代、現地調査の限られた作業時間と品質精度の狭間の中で計画策定で度々、逡巡した経験がある。農業は座学通りに行かぬことは自明の理である。「農業のことは農民に聞け、稻の事は稻に聞け」と横井時敬翁が云うように農業は実践学である。

引退後はこれまでの農民に普及する側から汗を流して生産する側で農業に取り組み、生産者の視点と技術を磨く事である。現在、自然生態系に畑環境を近づける有機農法を軸として11アールの畑を借り、6羽の平飼養鶏と共に毎日、新しい発見に対応を迫られながら農的暮らしに明け暮れる日々である。

最後に学生諸君が自分の進むべき道を見つけ、進む上で自分の経験から「人との出会いを大切に己の可能性を信じ、感性に根差したキャリアビジョンを強くイメージしてそれに近づく行動を続ける限り、夢は必ず実現する」格言を贈ります。

開発学科を卒業して10年経って

開発48期 小松原 崇



コメの苗床作りの研修(ザンビア)

私は国際協力機構(JICA)がザンビア共和国で実施するコメ普及支援プロジェクトに稲作技術の専門家として参加している。2007年に開発学科を卒業して早いもので

10年が過ぎた。この原稿をザンビアで書きながらこれまでを振り返ると自分がいかに迷つてばかりいたかという事に愕然とするが、何をしてきたかを端的に言えば、自分がどのように「開発」と関わるかを考えてきた10年だったようと思う。結論から言うとまだまだこの問題を模索中ではあるが、今の仕事にたどり着いた経緯をまとめてみたい。

私は開発学科48期生として国際農業開発学科に入学した。学部時代は熱帯作物保護学研究室に所属し、植物ウイルスの研究をしていた。学部時代はアジアアフリカ研究会や海外移住研究部で活動する同級生のように「開発」について何か熱い気持ちがあったわけでもなく、海外志向もあまり強くはなかった。この時は単純に実験をする行為が楽しく、将来は日本の農業試験場などで仕事が出来ればいいなと考えていた。研究職をめざしていた私はそのまま修士課程に進んだが、今の仕事をめざす一つのきっかけはこの時にあったと思う。大学院での研究のためミャンマーで調査を行ったが、この時に中国との国境地域で活動するJICAプロジェクトの活動サイトを訪問する機会があった。この地域はかつて黄金の三角地帯と呼ばれ、ケシ栽培で農家が生計を立てていた。しかしながらケシ栽培が禁止されると農家が収入源を奪われ貧困に陥ったため、このプロジェクトはこうした農家の収入向上を目的として活動されていた。当時の私は海外経験も乏しく、見るもの全てが新鮮だったが、こうした辺境の地で活動する専門家という仕事にかっこよさを感じ、この業界に興味を持つようになった。このころから少しずつ「開発」という分野に自分がどのように関わるかを模索し始めたと思う。

大学院を卒業した後は化学系の民間会社で技術者として3年勤務した。この時はまだ自分が開発業界で仕事をする姿を想像出来ておらず、漠然とまずは何かの技術を身に着けなければいけないという意識があった。しかしながら、業務でインドネシアやタイで仕事をする機会があり、海外で仕事をする面白さを感じ

じて早く海外で仕事がしたいという気持ちが強くなった。その後、民間会社を退社し、青年海外協力隊員としてウガンダ共和国に赴任した。これまで技術者として「開発」に関わる事を考えてきたが、村落開発普及員として農村部が抱える問題を探しながら、自分に何が出来るか振出しに戻って考えようと思っていた。ウガンダでの2年間はとても楽しかった。今振り返っても嫌な思い出は特にない。このことが実際に今の仕事をする決心となっている。一方で、自分の協力隊員としての活動に対する不甲斐なさは大きく、また自分が「開発」にどう関わるか?という疑問は赴任前よりも膨らんでいた。

その答えを求めてイギリスの大学院で開発社会学を学ぶ専攻に進んだ。大学院での最初の授業は「開発とは何か?」という授業であった。ここで



専門家との農家調査(ウガンダ)

目から鱗な答えを見出せていたら、今回のこの文章も收まりがいいのだがそんな事ではなく、恥ずかしながらより混乱したというのが正直な所だった。

しかしながら、これまでの経験を踏まえて開発分野で仕事をする上では2つの考えが浮かんでいた。一つは、農村を理解することは難しいという事。ドナー側に立った場合、少なからず農村部に住む人々の生活に変化を与える事になる。その変化は彼らが本当に求めているものなのか、彼らの本音をどれだけ理解しているのかを常に自問自答しなければいけない。もう一つは、出来るだけ農村部に触れてみたいという事。留学を通して農村部の社会関係資本や、彼らが近代化をどう受け入れていくのかというような経済人類学に興味がある事が分かった。この2つの考えを踏まえると、農村に行き、農民に直接会って話を聞け、長期的に彼らの変化を見る事が出来る仕事である必要があり、それが長期派遣という形態の技術協力プロジェクトであった。“開発ワーカーとしてプロジェクトの末端で農民と共に仕事をする”これが今の所たどり着いた自分なりの「開発」との関り方である。

というわけでザンビアにたどり着くまでに10年かかってしまった。次の10年はしっかりと地に足を付けて仕事をしなくてはと、この場をお借りして自分を戒めておく。きっとこの先まだまだ迷うのだけれど…。

学科の動き

2017年度の本学科(入江憲治学科長・入江満美前期主事・中西康博後期主事)の動きは以下の通りである。

2017年		
3月	20日 2016年度卒業式(卒業者169名)	
4月	2日 2017年度入学式(入学者155名)	9月 20日 編入学試験 21日 後学期授業開始
	5日~6日 新入生学外オリエンテーション (神奈川県立足柄ふれあいの村)	10月 5日~11日 農業開発実習(第3組、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生43名、引率:杉原たまえ教授)
	7日 前学期授業開始	11月 3日~6日 収穫祭(11月3日は兼、ホームカミングデー) 4日 拓友会第58期総会、懇親会 6日 体育祭
	13日~19日 農業開発実習(第1組、東京農大宮古 亜熱帯農場にて、学生43名、引率:入江満美准教授)	12月 26日~1月8日 冬季休業
6月	1日~7日 農業開発実習(第2組、東京農大宮古亜熱帯 農場にて、学生45名、引率:足達太郎教授)	2018年
	3日 教育懇談会	1月 9日 後期授業再開 29日~2月2日 後学期定期試験 31日 卒業論文提出締め切り
7月	22日~23日 地方教育懇談会	2月 4日~10日 農業開発実習 (第4組、東京農大宮古亜熱帯農場にて、学生44名、 前半引率:山田隆一教授、後半引率:杉原たまえ教授)
	28日~8月3日 前学期定期試験	3月 7日~9月20日 夏季休業 20日 卒業式
8月	5日~6日 キャンパス見学会	
	7日~9月20日 夏季休業	
9月	4日~8日 農業総合実習(1年生、伊勢原農場にて)	

2017年度 東京農業大学国際農業開発学科卒業論文 拓友会賞

インドネシア西ジャワ州チアンジュール県パチャット市における農村女性グループ(KWT)の起業活動の実態について

農村開発協力研究室 岩本 千夏
指導教員 飯森 文平・杉原 たまえ

本研究の目的は、インドネシアにおける農村女性グループの起業活動の実態について検討することにある。近年、農村女性の活躍がクローズアップされており、日本でも道の駅や農産物直売所などで積極的な活動に取り組んでいる女性に注目が集まっている。その多くが女性起業を果たした人たちである。インドネシアにおいても農村部に目を向けるとそうした活動が見られるものの、その実態について詳しく研究したものは日本語の論文はおろか、インドネシア語で研究されたものも極めて少ない状況である。本論文はこうした背景を踏まえ、インドネシアにおける農村女性グループの起業活動の実態について詳細なフィールド調査から捉えることを試みている。

本論文は全5章で構成されている。第1章では研究の背景と目的及び方法について整理している。ここでは、農村女性起業活動とインドネシアにおける女性のエンパワーメントの双方において、「女性の自主性」「女性の積極性」「女性の自立」が重要なキーワードとなっていることが指摘されている。第2章ではインドネシアの開発計画における女性の位置づけを明らかにすると共に、家族福祉運動(PKK)の特徴について整理している。PKKは女性を生活改善運動の担い手に据えた重要な活動である一方、その活動自体はヒエラルキー的な組織構造に基づく上からの政策となり必ずしも女性のエンパワーメントには繋がらないことが示されている。第3章では、インドネシアにおける農村女性グループ(KWT)の起業活動の実態と特徴について、西ジャワ州チアンジュール県パチャット市における

5つのKWTを事例に詳細なフィールド調査から分析している。ここでは、設立契機、メンバー構成、活動内容、活動資金など総合的に調査を行っているが、重要な分析結果としてKWTの活動はメンバーで自主的に行われる「完全独立型」と政府や外部組織からの働きかけで始まった「公共団体支援型」に分類できることが指摘されている。第4章ではKWTの活動の課題に言及しており、具体的には①マーケティング②ハラール対応③資金不足④適切な加工技術について指摘されている。終章ではこれまでの議論のまとめと今後の展望について日本の道の駅の経験も視野に入れて言及している。また、第4章で指摘されているように、活動自体が上からの働きかけで開始されることがあるものの、KWTに参加している女性たちの実際の声(調査結果)から、KWTの活動が「女性の自主性」「女性の積極性」「女性の自立」において重要な意義を持つことを指摘している。

本研究の取り組みは以下の点で優れている。

①既存研究が極めて少ないインドネシアにおける農村女性グループの起業活動の実態について、詳細な現地調査に基づき貴重な示唆を多数与えている。②著者は3年次に1年間インドネシアのボゴール農科大学に留学し、本研究のためのフィールド調査を複数回にわたり実施している。著者はこの留学期間中に現地語を習得し、本研究の調査は現地語にて実施していることは特筆すべき事項である。現地の言葉を用いることで現地の人からより正確で貴重な話を聞くことができたのである。③また、本論文にも付録として収録されているが、著者は本調査結果を現地語で論文にまとめている。これはフィールド調査者にとってまさに理想的な還元方法であろう。著者のこうした「地域に寄り添い、ひたむきに努力する姿勢」は非常に高く評価できる。

(文責:飯森)

受賞の感想と近況

岩本 千夏

この度は、平成29年度卒業論文において拓友会賞を頂きまして誠にありがとうございました。受賞を大変光栄に思っております。卒業論文を執筆するにあたり本当に多くの方々にお世話になりました。農村開発協力研究室の諸先生方をはじめ同期、先輩、後輩、留学先であるインドネシア・ボゴール農科大学アグリビジネス学科の諸先生方、友人、本論文研究地であるチアンジュール県パチャットの村民の皆様、ご協力頂きました全ての皆様方のお陰をもちまして本論文を完成させることができ、今回の受賞に繋がりましたことを深く感謝申し上げます。

「インドネシア西ジャワ州チアンジュール県パチャット市における農村女性グループの起業活動の実態について」という題目で卒業論文を執筆致しました。日本の地方で盛んに見られる婦人会の活動をイメージしていただけたと分かり易いかもしれません。インドネシアにおいて宗教上の理由から女性は守られるべき存在であり、あまり前へ出していくような風習はありません。しかし、「農村女性」にスポットを当ててみると、若年層の女性の活躍が多く見られることに気づき、まだほとんど研究されていないその実態に興味関心を持ったこ

とが本論文に取り組んだきっかけです。

私は、小さい時から自らの興味の赴くままに行動し、自身の目で見て、肌で感じることを大切にしてきました。高校生の時にゴミ問題のプロジェクトで初めて渡尼して以来、大学時代はアジア新興国をバックパッカーとして渡り歩いた経験があります。その中でインドネシアを再訪した際に感じた農村女性に関する疑問をきちんと解決するためには、現地に身を置き勉学に励むことが最良だという判断の下、一年間の留学を決意し、研究をして参りました。

インドネシア語を中心とした生活に戸惑いを感じながらも、自分を信じ、周りに頼りながら手探りの研究をしていた当時を懐かしく思います。「稻のことは稻に聞け、農業のことは農民に聞け」まさにその姿勢を実践し続けた一年間であり、結果として納得のいく卒業論文を書き上げることが出来たと考えております。

この春、東京農業大学を卒業後、宮城県に本社を持つ総合メーカーに就職致しました。現在は地元埼玉を離れ、宮城県仙南でマーケティングの業務に携わっており、新商品を生み出し、マーケット創造や定着に向けて日々仕事に邁進しております。今回の受賞を糧に、夢であるインドネシアで活躍する人材になるべく引き続きキャリアアップしていく所存です。

フィリピン農村社会における生活維持基盤の実態—ラグナ州プイパイ村における助け合いと住民組織を事例に—

農村開発協力研究室 高木 芽衣
指導教員 飯森 文平・杉原 たまえ

近年、フィリピンは著しい経済成長を遂げる一方で、未だ国内における経済格差が存在し農村部では多くの貧困層が居住している。本論文ではこうした状況を踏まえたうえで、フィリピン農村社会における生活維持基盤の実態について、「住民同士の助け合い」や「村内住民組織」に着目し、詳細な現地調査に基づき著述することを目的としている。

本論文は全6章で構成されている。第1章では研究の背景と目的及び研究方法が述べられる。第2章ではフィリピン社会の概要について貧困問題を中心に整理している。第3章では、「バヤニハン」と呼ばれる相互扶助的価値観に基づく慣行についての特徴と変容について論述している。第4章では農村地域における「助け合い」と「住民組織」の実態について、ラグナ州ベイ町プイパイ村(バランガイ)で実施した詳細なフィールド調査の結果に基づき検討を行っている。第5章では教会組

織についてコミュニティの維持という観点から検討を行っている。第6章では議論のまとめを行ったうえで、調査村における生活維持基盤の実態について考察している。

本論文の重要な指摘事項は以下のとおりである。

①フィリピン農村では依然として貧困が大きな問題となっている。②従来フィリピンにおいては、バヤニハンと呼ばれる伝統的相互扶助慣行がセーフティネットとして機能してきたが、経済発展や市場化の影響により、現在ではほとんど見られなくなっている。③調査村でも伝統的な意味でのバヤニハンは消滅したもの、村の中では住民同士の助け合いが活発に行われており貧困層にとってセーフティネットとして機能している。④同時に、調査村内では現在9つの住民組織が存在し人々の生活を支える役割を果たしている。これらは、住民が主体的に組織したものではなく、いわゆる政府支援の受け皿として上から作られたものであるが、設立から年数が経つにつれ住民たちの自主的な組織としての性格を持ち始める。⑤こうした状況はこれまでフィリピン行政の末端として政府支援の主たる受け皿となってきたバランガイの機能の各住民組織への移行と捉えることができ、これにより適切で細かな対応が可能となる。

住まい作りのトータルプランナー
宅地建物取引業 千葉県知事免許(10)第6298号

 南房商事株式会社

代表取締役 藤井 勝政(拓殖1期)

〒297-0029 千葉県茂原市高師57番地
電話 0475(23)3251(代表)

地域一番の品揃え
花と緑
TABLE GARDEN CENTER
契約農家直送、だからこそ新鮮!!

テーブルガーデンセンター

TEL 045-935-4187(代)
〒226-0023 横浜市緑区小山町 611-3
代表取締役社長 篠原 敬一(拓殖20期)

⑥宗派により状況は異なるが、宗教組織もコミュニティをつなぐ役割を果たす。⑦以上の議論を総括し、調査村における生活維持基盤は「人々の助け合い」「各住民組織」「バランガイ」「宗教組織」などにより重層的に構築されている。

本研究の取り組みは以下の点で優れており表彰に値する。

①フィリピン農村における生活維持基盤の実態について重層的な把握を試みており、研究の実施に当たっては、村人及び各住民組織や宗教組織の関係者など多くの人々への詳細な

ヒアリング調査を実施している。また、調査村へ複数回通うだけでなく、他の村にも訪問することで研究を深めている。②著者は1年時から積極的に海外ボランティアなどの経験を積むと共に、3年時にはフィリピン大学ロスバニヨス校へ約10ヶ月間留学した。本研究は、こうした多くの得難い経験によって支えられている。著者のこうした「自らの足で歩き、現場から真摯に学ぶ姿勢」は非常に高く評価できる。

(文責：飯森)

受賞の感想と近況

高木 芽衣

この度は、平成29年度国際農業開発学科卒業論文において拓友会賞を頂き、ありがとうございました。このような光栄な賞を頂き、心から嬉しく思っております。論文を完成させるにあたり、農村開発協力研究室の先生方、同期、後輩には大変お世話になりました。ありがとうございました。また、この論文を書くための調査は、フィリピン大学に留学した際にお世話になった先生や友人たち、そして村長をはじめとした農村の方々の協力がなければ行うことができませんでした。この場を借りて感謝申し上げたいと思います。

私は入学前から海外に強い興味を持っており、1学年次にアジア農業論を受講してからは東南アジアに関心を持ちました。決して豊かではない多くの地域では人々はどのように生活をしているのか、格差とは何なのかが分からず、ボランティア等を通じ何度も東南アジアに足を運びました。しかし短期間の生活では見えないことが多い、また卒業論文を4年間の学びの集大成にしたいと考えたため、1年間の留学を決意しました。

その中で論文テーマに選んだのは「生活維持基盤」です。フィリピンは東南アジアで唯一のキリスト教国であり、裕福者から貧困者への施しが慣習化しています。また一部伝統的な支え合いかが残っている地域もあります。私は農村に通って人々の生活や活動を見させて頂きながら、そのような「助け合い」をキーワードに、貧困が目立つ農村においてどのように生活を維持しているのか、制度や慣習の面から論文研究に取り組みました。その結果、急激に発展していく中で様々な制度や活動を取り入れつつ、助け合い慣習や伝統、家族の絆を大切に生活している姿を知ることができました。研究を進める中では、言葉の壁など難しいことも多々ありましたが、友人や農村の方が助けて下さり、フィリピン人の温かい「助け合い精神」を、情報としてだけでなく私自身が肌で感じ取ることもできました。こうして、自身の学びのまとめとしても納得する論文を書き上げることができ、賞を頂けてフィリピンの友人や先生にも喜んで頂き、とても嬉しく思います。

現在私はIT企業に勤めており、国際開発には関係のない仕事をしていますが、将来的には身につけたITの知識と、大学時代に培ってきた東南アジアの経験を生かした仕事に就きたいと思うので、日々を大事にこれからも頑張っていきたいと思います。

農大での生活を振り返って

三簾 久夫

南米への夢を持って農大の門を叩いて47年、半世紀近い時間が経過した。そのうち、院生時代を含めた学生時代は10年、教員の期間は37年。まさか、大学での生活がこんなに長期間に亘るとは思いもよらなかった。農業の奥深さに対して無知の極みであったことを知らされた学部時代、1年間の派米実習では経験の重要性を認識し、大学院進学の決定的な要因となった。今にして思えば、それが原点であろう。

この半世紀の間に時代は加速度的に変化した。大学の教員に対する指導キャッチフレーズは研究教育の充実であったが、昨今は教育研究に変化した。一見、なんら変わらないように見えるが、大学の2本柱ともいるべき教育と研究の優先順位に入れ替わっている。本来キャッチフレーズは不足しているものを充実させるために、掲げるものである。とすれば、農大の伝統ともいるべき教育による人間性の醸成が薄れつつあること、人間関係の希薄化が農大生の中にも進行しつつあるのではないかだろうか。

一方、農学分野は先端研究の方向として、分野の細分化が進展している。遺伝子操作、植物工場など最先端農業の技術開発が日進月歩で進み、生産性、安全性の向上が図られている。評価はさておき、先端技術はパック技術として普及し、原理原則がブラックボックス化しているように思われる。それは細部

の技術の組合せで、問題が生じても専門職以外の対応が難しくなっている。このような細分化した農学、その研究者は生産現場としての農業との関連性を維持、認識しているのであろうか。

農業拓殖(現国際農業開発)学科に籍を置いて海外の農業を目にする機会に恵まれ、多くの知識と解決が難しい課題に出会った。しかし、足元に目を移した時、日本農業は農(なりわい)から懸離れ、経済活動重視のあまり農村は高齢化して疲弊の度合いは深化してきた。そして農村の位置づけは生産現場から心の原風景としての癒しの場に変わりつつあるように見える。それは今までバックボーンとして依拠してきた日本農業が、空洞化して砂上の楼閣になったように思われてきた(気づかなかつとも悪いが)。

時代は自然との対峙思想に準拠した西欧基準の科学に基づく物質経済重視の流れに載ってきた。今、世界はその思想に基づく二極構造が崩壊し、多極化しつつある中で不均衡な状況にある。新たな均衡は画一的ではなく、個性豊かで多様な要素で構成されるもの、競争原理でなく共存原理を基本とする人間相互及び人間と自然の共栄に似た熱帯雨林(東洋)的な思想を基本とすることが望ましいのではないか。

海外で遊び呆けた似非学者は偉そうなことを言えない、それは詭弁と言われるかもしれないが、農(なりわい)としての農(のう)からの再考は必要と思われる。老兵の戯言、長い間、ありがとうございました。

新任教職員紹介

熱帯作物保護学研究室 辻 聰



平成30年4月1日
付けで熱帯作物保護学研究室にて助教に就任致しましたので、この場をお借りしてご挨拶申し上げます。歴史ある国際食料情報学部国際農業開発学科の

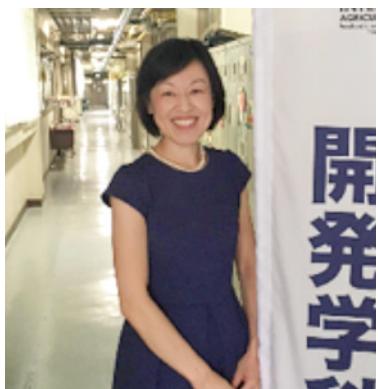
末席に名を連ねさせていただき、大変光栄に思っております。未だ就任より僅かな身ではありますが、海外に行くまたは海外から来ることの多い国際的な本学科の学生達の情熱を肌で感じることで、教育と研究の一端を担う者として責任を感じ、身が引き締まる思いで日々を過ごしております。

ここで簡単にではありますが、自己紹介をさせて頂きます。私は微生物の発酵に興味を持ち、平成16年に東京農業大学応用生物科学部生物応用化学科に入学。平成25年に乳酸菌の

研究により東京農業大学大学院農学研究科農芸化学専攻にて博士の学位を取得いたしました。博士号取得後は東京農業大学短期大学部醸造学科にて助手として3年、助教として2年間の計5年間を教員として勤務しておりました。微生物学や遺伝子工学を専門としており、これまでに微生物の遺伝子解析や生成される成分の探索などに取り組んでまいりました。これらの知識を活かして熱帯作物保護学研究室では室員と共に植物ウイルスや病害を引き起こすカビ、線虫の研究について取り組ませていただいております。

浅学菲才の身ではありますが、これまで学んできた経験を活かし、研究や様々な活動を通して、学生の教育に取り組ませていただきます。学生が自分自身で考え問題解決に向けて意欲的に取り組む能力を培った良き社会人となるようにサポートいたします。以上、簡単ではありますが新任の挨拶とさせていただきたいと思います。教育者としても研究者としても未だ経験が足らず、至らぬ点も多く在ると存じますが、全力を尽くして精進していきます。諸先生方、また国際農業開発学科を卒業し活躍されております卒業生の諸先輩方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

国際農業開発学科事務室 吉田 三恵（旧姓 西方）



2018年4月より、国際農業開発学科事務室に着任いたしました吉田三恵と申します。

この度は、20年ぶりの母校、しかも開発学科で勤務するご縁を頂き、感慨深い想いでいっぱいです。

私は1998年度卒業、開発39期生で、熱帯作物保護学研究室にて学びました。卒業後は、日本航空株式会社運航本部にて、運航乗員訓練生の庶務、採用、教育などに7年半従事し、その後は夫の転勤により金沢に在住、2018年3月までの5年間は金

沢大学医学部脂質研究室にて技術補佐員および医療秘書として勤務しておりました。

先日、ある先生から「農大で学んだことは役立ちましたか?」と質問されました。開発学科での国内実習、短期留学での実学経験はチャレンジ精神となり、社会に出てからも臆することなく仕事へ邁進する力となりましたし、医学部でのドクターとの実験においても保護学研究室で身につけた多くの実験経験があったからこそ行えたと心から思えます。母校・開発学科での経験はどの場面においても形を変えながら、私の人生に大いに役立っています。

開発学科の学生には、充実した学生生活を送り、出会った方々から多くを学び経験し、春には母校・開発学科に誇りを持ち、社会へ羽ばたくことを一番に願っております。

末筆ながら、私自身も1日も早く、開発学科に貢献できる人材となるよう精一杯努めて参りますので、諸先輩方、どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

まちに彩りを、人の心に潤いを



株式会社 ムラカミ シード
MURAKAMI SEED CO.,LTD



ユーストマパールホワイト

〒309-1738 茨城県笠間市大田町341
TEL 0296-77-0354 FAX 0296-77-1295
E-mail: info@murakami-seed.com
<http://www.murakami-seed.com>



ピオラ うみもか

ムラカミシード
水戸研究農場

〒319-0323 茨城県水戸市鯉渕九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

ガーデンショップ
花みどり

〒319-0323 茨城県水戸市鯉渕九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

代表取締役会長 村上典男（拓殖23期）

村上 登（拓殖26期）

村上 忠義（拓殖29期）

在学生の活躍

全学応援団第87代団長 安齊 勇貴(開発60期)



エールをきる著者

初めまして、国際食料情報学部国際農業開発学科第60期生、及び、本年度、東京農業大学全学応援団第87代団長を務めております、安齊勇貴と申します。

私は平成27年に東京農業大学に入学し、入学式で大根踊りを披露した先輩方の姿に憧れ、応援団への入団を決意しました。入団当初は、挨拶や礼の仕方、言葉遣い、礼儀の指導など自分の想像を遥かに超える日々が続き、一日一日が刺激的な毎日の連続でした。

1年生の頃は練習、応援活動についていくのでやっとのことで、初めてのことは失敗など気にせず、がむしゃらに先輩たちの背中を追いかけておりました。しかし、2年生になると、1年生の頃とは扱いが変わり、失敗やミスなどは許されず、後輩の面倒と先輩達からの指導で、板挟みの代とも言われ、4年間の中では一番つらい学年でした。3年生になると、自分たちの発言や行動の責任が更に重くなり、後輩の手本になるべき存在で、翌年の最上級生になる為の真価を問われる学年でした。

応援団では、どのような厳しい条件下でも、倒れることのなく何時間も応援し続ける体力の養成や、どのような場面でも動じ

ない度胸、負けが決定的な場面でも最後まで応援し続ける精神力など徹底的に鍛えられました。今では、団長として、団員たちを統率し、野球、陸上をはじめとする、運動部の応援活動では力の限り誠心誠意を込めて応援し、大学の発展に貢献し活躍しております。

現在、3キャンパスの応援団の団員数は、学生服を着たリーダー部員が21名、チアリーダー部員が42名、吹奏楽部員が約90名となっており、3部合わせて総勢150名を超える団員達と共に学生の代表として、日々の応援活動に取り組んでおります。

応援団は厳しい縦社会でもあり、時には辛く、厳しい時期もありましたが苦労を共にした仲間がいたからこそ、ここまで続けることができました。今となっては応援団での思い出は自分にとっての大きな財産です。4年間の苦労と引き換えに人生にとってかけがえのない大切なものを得られました。



青山ひとり(大根踊り)の披露

教員が執筆した著書の紹介



飯森文平 (2018)
『農村経済と伝統儀礼 サモアにおける生活維持システムの研究』
農林統計出版 200P
2,600円+税
ISBN978-4-89732-382-4

南太平洋に位置する小島嶼国家であるサモアは、狭小性・遠隔性・環海性といった、いわゆる島嶼性を背景に、持続的な経済発展が困難な状況に置かれてきました。その一方で、村落社会に目を向けてみると、固有の価値観、制度、慣習などによって、ある種の「豊かさ」をもつ生活基盤が形成されています。

本書では、そうしたサモア固有の「豊か」な生活基盤が、

貨幣経済の浸透や経済のグローバル化が深化していく中でどのように構成、維持されているのか描き出すことを目的としています。より具体的には、海外移民からの送金などの影響も考慮に入れつつ、農村経済の実態と、サモアの人々にとって大変重要な意味を持つ儀礼の実践に着目し、サモア村落社会における生活維持基盤の形成過程について、現地調査に基づき解明することを試みています。

サモアの人々に接すると、自らの生活の形、文化、価値観に誇りを持ち大切にしていると同時に、固有の生活基盤を維持するために、工夫し、深く考え、時に悩みながら日々の生活を送っていることが感じられます。本書を通じて、読者にそうしたサモアにおける「日々の営み」の一端も示すことができれば嬉しく思います。

株式会社メルカード東京農大

〒156-8502
東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学16号館2階
TEL : 03-5477-2250
FAX : 03-5477-2251
Web : <http://ichiban.co.jp>

第58期 会計収支決算

(平成28年10月1日～平成29年9月30日)

一般会計

収入の部	予算	決算	差異
1. 会費	1,700,000	1,570,000	▲ 130,000
卒業生	1,650,000	1,360,000	▲ 290,000
既卒者	50,000	210,000	160,000
2. 事業	430,000	360,000	▲ 70,000
ニュース広告	250,000	210,000	▲ 40,000
行事等収入	180,000	150,000	▲ 30,000
3. 寄付金等雑収入	50,000	97,008	47,008
4. 前年度繰越	200,273	200,273	0
合 計	2,380,273	2,227,281	▲ 152,992

支出の部	予算	決算	差異
1. 事業支出	1,200,000	1,111,333	▲ 88,667
総会費	180,000	178,014	▲ 1,986
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	420,000	409,755	▲ 10,245
拓友会賞	100,000	43,564	▲ 56,436
在校生への補助	200,000	180,000	▲ 20,000
2. 管理費	900,000	673,234	▲ 226,766
会議費	100,000	94,058	▲ 5,942
印刷費	20,000	4,195	▲ 15,805
交通費	50,000	38,000	▲ 12,000
通信費	500,000	474,954	▲ 25,046
消耗品費	100,000	540	▲ 99,460
雑給費	100,000	50,000	▲ 50,000
雑費	30,000	11,487	▲ 18,513
3. 特別会計積立金	100,000	300,000	200,000
4. 予備費	180,273	20,000	▲ 160,273
5. 次年度繰越金	0	122,714	122,714
合 計	2,380,273	2,227,281	▲ 152,992

特別会計

収入の部	予算	決算	差異
1. 前年度繰越	1,924,932	1,924,932	0
2. 一般会計より繰入	100,000	300,000	200,000
3. 雑収入	350	7	▲ 343
合 計	2,025,282	2,224,939	199,657

支出の部	予算	決算	差異
1. 次年度繰越金	2,025,282	2,224,939	199,657
合 計	2,025,282	2,224,939	199,657



第59期 会計収支予算

(平成29年10月1日～平成30年9月30日)

一般会計

収入の部	第58期	第59期	差異
1. 会費	1,700,000	1,870,000	170,000
卒業生	1,650,000	1,720,000	70,000
既卒者	50,000	150,000	100,000
2. 事業	430,000	380,000	▲ 50,000
ニュース広告	250,000	200,000	▲ 50,000
行事等収入	180,000	180,000	0
3. 寄付金等雑収入	50,000	50,000	0
4. 前年度繰越	200,273	122,714	▲ 77,559
合 計	2,380,273	2,422,714	42,441

支出の部	第58期	第59期	差異
1. 事業支出	1,200,000	1,160,000	▲ 40,000
総会費	180,000	180,000	0
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	420,000	450,000	30,000
拓友会賞	100,000	50,000	▲ 50,000
在校生への補助	200,000	180,000	▲ 20,000
2. 管理費	900,000	900,000	0
会議費	100,000	100,000	0
印刷費	20,000	20,000	0
交通費	50,000	50,000	0
通信費	500,000	500,000	0
消耗品費	100,000	100,000	0
雑給費	100,000	100,000	0
雑費	30,000	30,000	0
3. 特別会計積立金	100,000	200,000	100,000
4. 予備費	180,273	162,714	▲ 17,559
合 計	2,380,273	2,422,714	42,441

特別会計

収入の部	第58期	第59期	差異
1. 前年度繰越	1,924,932	2,224,939	300,007
2. 一般会計より繰入	100,000	200,000	100,000
3. 雑収入	350	100	▲ 250
合 計	2,025,282	2,425,039	399,757

支出の部	第58期	第59期	差異
1. 次年度繰越金	2,025,282	2,425,039	399,757
合 計	2,025,282	2,425,039	399,757

農業生産法人(株)ライフオン

桶 口 稔
(拓殖 10 期)

〒059-0272 北海道伊達市北黄金町 119-47
〒181-0004 東京都三鷹市新川 3-15-12
Tel:0422-48-8976
Mobile:090-3203-4950

人生のベースは農大時代

JA全農会長 長澤 豊氏
(昭和48年 農学部農業拓殖学科卒業)

JA全農は7月25日、経営管理委員会会長にJAグループ山形5連会長の長澤豊氏を選んだ。日本農業の経済事業を支えるトップだ。長澤会長は昭和48年農学部農業拓殖学科を卒業。30年余り農協運動と経営に携わってきた。「これまでの人生のベースは農大時代にある」と振り返る長澤会長に、ズームアップ「人」のインタビューをした。

(聞き手は東京農業大学校友会の小野甲二常任理事・事務局長)

今に生かす人間関係

—— 農大時代を振り返ってどんな思いをお持ちでしょうか。

農大の4年間というものは一番思い出深いものです。もちろん研究面で人生を深めることもありますが、さらに幅広く、ウイングを広くということが自分にとっては大事なことでした。ここが私の生き方にとって一番のベースになるわけです。

私は農大から歩いて5分ぐらいのアパートに住んでいました。大学も近いし、授業が終われば仲間が集まってきてよくマージャンをしたものです。大学の研究室をはじめとしたいろいろな仲間がいました。その関係は今も続いています。

ちょっと落ち込んだときに学生時代を思い出します。今、全農会長として改革の中にあっていろいろたたかれながらもそれを跳ね返す原動力になっています。

全農はJAグループの経済事業を担っているわけですから、いろんな業態と結びつき、人間関係をつくりながら、信頼関係で新しいものを作り上げていくことが大切です。相互扶助あるいは共生経済、共生社会の創造です。そういう意味では初代学長の横井時敬博士が農大を建学するにあたっての基本的な哲学は、時代は変わった今も大切にしていかなければいけないなと思っています。

—— 農業拓殖学科に学ばれましたが。

私は短大から昭和46年に拓殖に進みました。農業拓殖学科では先生方はもちろん、先輩や友人にも恵まれ、勉学も含め楽しい学生生活を送りました。

何とか無事に卒業した後は、請われて母校の上山農高で常勤講師をやらせてもらいました。その後、家業のブドウ農園を継ぎ、10数年続けて農業拓殖学科の実習生を受け入れていました。

農協運動一筋に貫く

—— 人生の半分ぐらいは農協運動に携わってこられた。

父が山形市の本沢農協の組合長でした。その父が亡くなつたので私も父のようにやりたいということで、昭和59年に33歳で理事に就任しました。あれから34年が経過しました。私ならば、農協ならば、山形県JAグループならば、全農ならばどうやつたら存在感を示して、国民に理解していただけるかと絶えず考え、これからも組合員に情報を発信したいと思っています。



例えば全農の飼料関係のグループ会社が米国にあります。これは全農グレイン。世界を凌駕(りょうが)するぐらいの飼事業をやっている会社です。米国のカーギルがこの会社を欲しがっています。全農の先輩たちが築き、将来を見据えてやってきたことが生きているわけです。そういったことは伸ばさなければならないし、一方では新しい事業や商品を創造し、世界に発信していくなければなりません。

今、全農改革に力を入れています。これから全国の農協を回って農家の声や組合長の話を聞く機会もつくりたいと思っています。土日・祝日も使わなきゃいけないことになりそうです。私は全農副会長時代に1回母校に行きました。そのとき女子学生が多いのにびっくりしました。

—— 今年は農大合格者の52%が女性でした。

食を担っている分野は女性を登用してトップランナーにしなければいけない。さらに言えば管理職に登用する。日本の農業は女性が担っているのです。しかもご飯を作つて働いて、農家の女性は大したものです。女性と男性では発想が違います。それを生かしてもらいたい。

農高を卒業して進学

—— 農大に進学された動機は。

あの時代に農高を出て農大に行きました。わくわく感があつて夢が描ける学生時代という期間を親からもらったということです。

いずれは農業をやらなきゃいけないとは思っていましたが、やっぱり東京に行きたかった。中卒で就職する人も多い時代、農業高校から大学に行くというのは数人でした。

何より農大は授業料が安かった。私の仕送りは2万円、授業料は年6万円でした。卒業してそれ以上のものを得ています。

ふれあいの旅を演出する (株)アルファインテル

代表取締役: 佐藤 貞茂 (拓殖15期)

電話: 03-5473-0541
FAX: 03-5473-0540
✉ www.alfainter.co.jp
✉ info@alfainter.co.jp

〒105-0004 東京都港区新橋 3-8-6 大新ビル 3階
平日 9:30~18:30 土曜日 9:30~12:00 日・祝日は休み

観光庁長官登録旅行業1835号
IATA(国際航空運送協会)公認代理店
社日本旅行業協会正会員
社団法人海外ツアーオペレーター協会正会員

ALFAINTER

東京都知事登録旅行業第3-5792号



キックス・エアー・チケット
株式会社 キックス

代表取締役 塩満 仁

〒187-0003
東京都小平市花小金井南町2-17-2-603
Tel 042-458-1180 Fax 042-458-1180
携帯 090-1761-0970
E-mail shiomitu@bird.ocn.ne.jp
E-mail info@kix-j.co.jp

<http://www.kixairticket.com>

学生はポジティブに

—— 今の学生に先輩として伝えたいことがあれば。

私たちの時代と違って、今の学生たちは本当にいい環境にあると思います。

4年間の学生生活で、人間形成がきわめて重要だろうと思っています。だからこそ学内にとどまらず、いろいろなところを見てほしいと思っています。そして絶えずポジティブに生きるための強さを身に付けてほしい。

そのために、いかに生きるかというジャンルについても探究し、

研究を深めていただきたい。自分の思いを形にするためには、絶えず考え続けることが大切です。個人も大切にしてもらいたいけれども、農大は農業がベースなので、食と共に生きてるんだというものを強く持っていただきたい。

勉学だけでなく、スポーツでも頑張ってほしい。箱根駅伝になかなか出られないのが残念でなりません。箱根に出てもらえば、スポーツを通した大学の広報力になります。この広報はものすごく大きい。名物の大根踊りをぜひ正月のテレビで見たいものです。

※本インタビュー記事は、平成29年11月1日付の『東京農業大学校友会ニュース』(第122号)に掲載されたものです。

ブラジル東京農大会 創立50周年記念事業 募金趣意書

ブラジル東京農大会 会長 原島 義弘

時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご厚情にあづかり心より感謝申し上げます。

はじめに我々は、「ブラジル国社団法人・ブラジル東京農大会」そして「東京農大校友会ブラジル支部」さらに「東京農大伯国研修センター」という三つの肩書きを持ちますが、以下この趣意書では「ブラジル東京農大会」と称します。

1908年6月18日、ブラジルでの新しい可能性を求めて、笠戸丸に乗った781人が、サントス港に上陸したことから開始されたブラジル移住は、2018年に110周年を迎えた。今まで約26万人の日本人が移住し、現在ブラジル日系人口は190万人という世界で他にない日系社会を築いています。

そのような中で、農大移住は1914年の坂東喜内校友に始まり、今まで総数268名の校友が当地に渡り来て、この内71名が帰国し、197名校友が移住者として根を下ろし、現在112名校友が多く苦難に耐えそれを乗り越えブラジル各地で活躍しています。そして、1969年に発足した農大会は2019年に「創立50周年」を迎えます。特筆すべきことは、日本の他の大学卒が多く移住てきてそれぞれ会を立ち上げても、母校との絆によって、ブラジル社会に於いて公式拠点を持ち活動しているのは農大会のみです。

顧みますれば、拓友の学生移住から20年、農大会創立10年目にそれまでの先生方の調査や学生実習受け入れを苦しい中で私財をもって世話をしていた校友会に母校の助成が行われ、1979年にアクリマソン区に拠点を持ち、その後、2003年に時代の要求で現在のサウジ区に移転し今日に至り

ます。この間に、その時代、時代の役員ならびに校友会員のボランティアにより母校から約460名の学生を実習生として受け入れてお世話ををしてきました。

創立50周年という節目を迎えて、会館は運営上及び法令改正上から大規模な諸設備品の更新と、外部と内部の改装や塗装さらに学生寮の増築が喫緊の課題となりました。総予算2千万円で、内5百万円を内部で調達し、残1千5百万円を大学にお願いをしております。つきましては、本会の活動の趣旨にご賛同をいただき、何卒ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

【ブラジル東京農大会 創立50周年記念事業 募金先】

口座銀行名：ゆうちょ銀行

口座記号番号：00160-3-33583

口座名：東京農業大学拓友会

※振込用紙に「ブラジル東京農大会への寄付」とご記入下さい。

◎募金のお問い合わせはこちらにお願いします。

〈 国 内 〉 東京農業大学国際農業開発学科
中曾根勝重
Fax:03-5477-4032
E-mail:katsu10@nodai.ac.jp

〈 ブラジル 〉 ブラジル東京農大会
総務理事 戸国 達夫
E-mail:tokuni.nodai@gmail.com
nodai@uol.com.br



2007年から国際農業開発学科を志望する中高生向けに学科を分かりやすく紹介するホームページ (<http://www.nodai.ac.jp/int/develop/index.html>) を公開しました。

海外実習や国内（学内・学外）実習、教員・学生の調査の様子、研究の様子について学部生・院生・教員からの投稿記事を随時掲載中。[\(http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php\)](http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php)

国際協力を志すご子弟や教え子の進学先を考えていらっしゃる方、是非一度アクセスを。

学科教員・学生の受賞記録

【日本熱帯農業学会論文賞 受賞】

志和地弘信(国際農業開発学科 教授)、パチャキルバビル(国際農業開発学科 助教)、菊野日出彦(宮古亜熱帯農場准教授)、田中尚人(分子微生物学科 教授)による"Nitrogen-fixing Endophytic Bacteria is Involved with the Lesser Yam (Dioscorea esculenta L.) Growth under Low Fertile Soil Condition"(ヤムイモに共生する窒素固定細菌に関する論文)が日本熱帯農業学会論文賞を受賞

【第28回日本熱帯生態学会年次大会 優秀発表賞】

檜谷昂(国際農業開発学専攻博士後期課程2年)、澤田大和

(国際農業開発学専攻博士前期課程2年)、増田憲(国際農業開発学専攻博士前期課程2年)、中西康博(国際農業開発学専攻 教授)は、第28回日本熱帯生態学会年次大会(平成30年6月9日~10日、静岡大学)において、優秀発表賞を受賞。題目:マングローブ葉植食性ベントスの溶存鉄生成への寄与

【東京農業大学ベストティーチャー賞 受賞】

中曾根勝重(国際農業開発学科 准教授)がベストティーチャー賞を受賞。平成30年6月16日(土)に実施された第18回東京農業大学ホームカミングデイ(東京農業大学世田谷キャンパス百周年記念講堂)にて表彰。

研究室紹介

熱帯園芸学研究室

熱帯園芸学研究室は、現在、小塩海平先生、弦間洋先生、真田篤史先生のご指導のもと、野菜、花卉、果樹を中心とした園芸作物の栽培環境とその生育について研究を行っています。以下に主な研究内容を紹介します。

【熱帯園芸作物の生理・生態に関する基礎的研究】

植物成長調節剤が園芸作物の生育・収量に及ぼす影響や熱帯園芸作物の鮮度保持について、気候温暖化が休眠生理に及ぼす影響などを主に研究しています。具体的には、エチレン阻害剤の1-MCPを用いた鮮度保持やCA貯蔵、青葉アルデヒドに関する研究など多岐にわたり、熱帯地域に応用できる技術の開発を目指し、研究に取り組んでいます。

【環境ストレス下における作物品質や有機農業技術に関する基礎的研究】

有機質肥料の機能性や、熱帯の湿潤および乾燥地における作物生産の阻害要因、水分ストレスや塩類集積が作物の生育に及ぼす影響などを研究しています。具体的な研究例としては乾燥ストレスがトマトの収量および品質に及ぼす影響、日照条件及び温度条件の違いがパッショングルーツの着果に及ぼす影響、Ca肥料の果実散布が大玉トマトの尻腐れ果および裂果の発生に及ぼす影響などが挙げられます。

【バイオテクノロジーを利用した園芸作物生産に関する基礎的研究】

植物組織培養を用いたウイルスフリー苗の大量増殖などを目的として日々、研究に励んでいます。現在行われている具体的な

研究としては、パッションフルーツの無病苗の作出と増殖、属間で交雑した観賞用バナナの耐寒性品種育成および選抜などが挙げられます。

主な学生活動:現在、4年生21名、3年生21名、2年生10名、1年生10名に大学院生が8名在籍しており、留学生も多く国際色豊かな研究室です。

1・2年生は圃場や温室で作物の栽培練習を行ったり、実験技術を身につけたりします。3年生は研究室活動の中心的な役割を果たすようになります。毎年、9月下旬ごろから銀杏拾いをし、収穫祭模擬店で販売しています。とても大変な作業ですが銀杏拾いを通して室員間の信頼関係を築き、何十年と続く熱帯園芸学研究室の伝統を守っています。4年生は研究室全体をまとめながら、それぞれの卒業論文の実験や調査に取り組んでいます。私たち熱帯園芸学研究室では自分で植物を栽培して研究を行う学生が多く、灌水や調査などに追われる毎日です。

普段の活動としては、毎週月曜日に先生方を交えた昼食会、ゼミ活動を行っています。ゼミでは学年に関係なくグループを作ってディスカッションやプレゼンテーションを行っており、お互いに刺激しあいながら学んでいます。研究室の年間行事として、5月に新入生歓迎会、6月・11月に研修旅行、8月・12月に納会、11月にOBOG会、2月に追い出しコンパがあります。



研修旅行にて



おいしさは愛。

ハム工房ぐろーばるのハム＆ソーセージは、《和豚もちぶた》を100%使用しひとつひとつ手間と時間をかけてつくられます。



ハム工房
ぐろーばる

〒377-0052 群馬県渋川市北橘町上箱田800
TEL 0279-52-3746 FAX 0279-52-3581
フリーダイヤル 0120-44-3746

クローバーリピックファーム株式会社
代表取締役 赤地 勝美 (拓殖5期)
URL <http://www.gpf.co.jp>